

平成24年度東京都広報コンクール

実 施 結 果

平成 2 4 年度東京都広報コンクール実施状況

区市町村の広報力の向上と、都と区市町村との連携による広報活動の充実を図ることを目的に、平成 2 4 年度東京都広報コンクールを下記のとおり実施した。

1 応募状況

(1) 応募作品数

部門	応募作品数
広報紙部門 区市部	3 3
広報紙部門 町村部	3
写真部門 一枚写真の部	1 5
写真部門 組み写真の部	8
映像部門	1 8
応募総数	7 7

(2) 応募区市町村数

3 8 区市町村（1 9 区・1 6 市・3 町村）

2 審査会

平成 2 5 年 1 月 3 0 日（水曜日）及び同年 2 月 4 日（月曜日）
東京都庁舎内会議室

3 審査委員

「平成 2 4 年度東京都広報コンクール審査委員名簿」のとおり（2 ページ）

4 審査結果

「平成 2 4 年度東京都広報コンクール入選作品一覧」のとおり（3 ページ）
なお、(社) 日本広報協会「全国広報コンクール応募要領」の応募基準に該当する各部門の上位の作品については、「平成 2 5 年全国広報コンクール」に東京都推薦作品として応募する。

5 表彰式

平成 2 5 年 3 月 8 日（金曜日） 東京都庁舎内会議室

平成24年度東京都広報コンクール応募作品審査委員名簿

部門	氏名	現職等	専門分野
広報紙	大井眞二	日本大学法学部新聞学科教授	マス・コミュニケーション論等
	長岡光弘	グラフィックデザイナー(株式会社たき工房)	広報紙のレイアウト編集等
写真	大石芳野	(社)日本写真家協会会員 フォト・ジャーナリスト (大石芳野写真集「HUKUSHIMA 土と生きる」 藤原書店より1月末に出版)	写真一般
	小林信行	東京都生活文化局 広報広聴部広報課写真担当係長	行政広報写真等
	板橋秀樹	東京都生活文化局 広報広聴部広報課主任	行政広報写真等
映像	関 裕敏	(株)電通 第4CRプランニング局長	広告企画・制作
	高橋幸作	(株)NHKエデュケーショナル 特集文化部統括プロデューサー	映像企画・制作

平成24年度東京都広報コンクール入選作品一覧

部門		賞	区市町村名	作品名	全国推薦
1 広報紙 (36)	(1)区市部 (33)	最優秀	中野区	「なかの区報」3月20日号	(非会員)
		一席	足立区	「あだち広報」10月10日号	○
	(2)町村部 (3)	二席	墨田区	「墨田区のお知らせ「すみだ」」11月11日号	○
			練馬区	「ねりま区報」11月1日号	
2 写真 (26)	(1)一枚写真の部 (15)	最優秀	江東区	「こうとう区報」6月11日号	○
		一席	瑞穂町	「広報みずほ」8月1日号	
		二席	墨田区	「墨田区のお知らせ「すみだ」」7月11日号	
			羽村市	「広報はむら」6月15日号	
	(2)組み写真の部 (8)	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」9月1日号	○
		一席	足立区	「あだち広報」8月10日号	
		二席	墨田区	「墨田区のお知らせ「すみだ」」3月1日号	
3 映像 (18)		最優秀	豊島区	区制施行80周年記念映像-TOSHIMA80-	○
		一席	八王子市	市民の広場「このまちで共に～障害がある人もない人も共に安心して暮らせるまちづくり」	
		二席	江戸川区	えどがわ区民ニュース 平成24年11月1日号特集 がんで命を落とさないために みんなで取り組むがん予防	(非会員)
			調布市	テレビ広報ちょうふ1月10日号	

* 表中()内の数字は応募作品数。

* 全国推薦は、入選作品のうち、全国広報コンクール応募要領の応募基準に該当する各部門の上位作品とする。

広 報 紙 部 門

〈広報紙部門 総評〉

●大井委員

3.11 東日本大震災がまさにその典型だが、事件・事故といった急激に展開をする事象は目に付きやすいが、環境問題のように目に見える変化が現れたときに、事態はかなり深刻化している事象はなかなか認識されにくい。その代表は環境問題であろう。地球温暖化を例にとれば、欧米の近代化を支えた哲学的基礎の「自由主義」や「個人主義」は、この問題を前にその根源的意味を問われることになった。有り体に言えば環境問題は「自分だけはいいだろう」を許してはならない、それがあつては解決しない問題である。哲学的問題の所以である。さらに問題の視覚を変えれば、環境問題はグローバル化した社会がもたらした事象とも言えるだろう。3.11 大震災を契機に原発問題が世界的なアジェンダとして浮上したが、普通原発建設の問題は国内的問題と考えられる。しかし、一度メルトダウンが起こったとき、近隣諸国に放射性物質は簡単に国境を超えて拡散する。これを国内問題として片付けることができるだろうか。グローバル化社会の問題の所以である。

さて、こうした前書きをしたのは、地方の自治体であれグローバル化社会の中の一コミュニティである、という発想が必要と思われる問題が顕在的であれ、潜在的であれ存在するからである。コミュニティを突き抜け、ナショナルをさらに超えて、グローバルに考え、かつ行動する。人口に膾炙される **Think globally, act locally** の発想である。現実は何をしたらいいのか戸惑うことが多いかもしれないが、まず足元を見据えて、問題の根源を探っていく地道な営為が、グローバルにつながると考えてみよう。

さて本題に入ろう。本年度の広報誌の審査を通じて感じたことは、上記の問題と関係するが、社会の動きをどう見るか、どう表現するか、の難しさである。ここの水が半分入ったコップがあるとする。「半分入っている」は客観的な表現だが、「半分しか入っていない」と「半分も入っている」はどうだろうか。前者はやや悲観的、後者は楽観的表現であり、「半分入っている」と比べれば、主観的な表現と言いうる。この種の表現は意外に落とし穴があつて、世の中の動き、景気、政治の動向に関する文章表現に置き換えてみれば、その難しさに容易に気づくだろう。社会の動向に関して悲観的にならざるを得ない各種の指標が並ぶとき、件の話で言えば、「半分も入っている」という思いで書くのか、「半分しか入っ

〈広報紙部門 総評〉

ていない」の視点にたつのか、で結果に微妙な差異がうまれる。この種の主観的な表現が直接紙面に掲載されるわけではないのはもちろんのことだが、この種の思いは時として行間に反映されることがある。表現者として自身の言語感覚を絶えず確かめる必要があろう。自戒の言葉「でも」ある。

次に過去と将来をどう見るか、の問題である。応募作品の中には、過去を振り返るよりも将来を見据える作品が多かった。具体的には、将来に向けた明るい話題を探して紙面化する、地域が発展する方向性をさりげなく示唆する、街の賑わいを盛り上げる、といった志向性を持つ記事が眼についた。閉塞的になりがちな社会の空気(*climate of opinion*)の中で、明るさを見出そうとする姿勢は極めて重要だ。ようするに、十分に現実を見据えた上で、将来を見つめる視点の確かさが感じられる作品が多かったのである。矛盾するようだが、過去を振り返ることを閉却してはならないことを、痛感させられる作品も決して少なくなかったことも指摘しておきたい。地域の文化資源に関する話題を取り上げた作品がそれである。歴史の軸として過去・現在・未来を一望できるような視点から、文化資源を取り上げた作品には思わず引き込まれた。単に存在するからという扱いではなく、資源としての価値を十分認識し、その価値をどのようにしたら高めることができるか、これがキーノートになっていると伺える作品が多かった。高く評価したい。

他にもあるが、それはそれぞれの応募作品に記しておいたのでこれ以上言及しない。総体的に言えば、広報誌を取り巻く環境は決して改善されたとは言えないだろう。それは応募作品に付された資料を拝見し、実際の紙面を閲読すると、そのことを痛感せざるを得ない。限られた予算やスタッフをはじめとする様々な制約にもかかわらず、斬新な企画、記事の切り口、文章表現やレイアウトに創意工夫を凝らし、懸命に紙面づくりに携わっている姿が目につかんできた。紙面にはそうした姿は直接登場しないけれど、紙面を通じてそれが感じられたのである。広報パーソンの皆様のご苦勞に、その奮闘ぶりに敬意を評したい。

〈広報紙部門 総評〉

●長岡委員

広報紙にとって、紙面前半は住民の注目を促す重要な紙面となる。その意味で、応募作、前・後号の前半紙面を読むことで、行政が何に力を注いでいるかがわかる。どの紙面も、行政の重要施策、住民への問題・対応等が掲載されており、住民へ重要な情報を強く訴求する紙面構成となっている。

紙面前半に組まれた企画は、防災関連、施行周年企画、子育て、夏休み企画等が最も多く見受けられた。編集の内容も住民が紙面に登場し、かつての告知型編集から住民参加型の編集内容へと編集手法も変化し、より訴求効果が期待できる紙面となっている。

見出しの立て方は、ダイレクト訴求が多いものの、小見出しを活用し住民に問いかける編集が目についた。住民への双方向性を意識した、広報担当社の文章力の向上を見て取れる。

視覚表現は、写真を巧みに用いて住民に訴求情報を分かりやすく図っている。写真の視覚的な効果を上手に引き出した、技量の高い紙面が多く見られた。

本文の組み方は、情報量に応じて縦組・横組を上手く使い分けている。また、高齢者に配慮し可読性を重視し、本文ポイントを上げた紙面も見受けられた。ただ、横組紙面で、1行の文字数が多く次行への移行が困難な本文、本文のポイント数に対して行間が狭く可読性が劣る紙面等、悔やまれる紙面も見受けられる。

紙面レイアウトは、罫線・囲み罫等を使い分け、同一紙面に掲載された様々な情報を上手に整理と区分けが施されている。また、デザインリニューアルを行った応募作も複数紙見受けられ、訴求力が増し変化する広報紙を見てとれる。

今回の審査で気になる点は、防災関連の企画で、ウェブ・携帯電話等と連携した編集紙面は見受けられるが、その他の企画では連携紙面が少ない。

広報の在り方も、ウェブ、携帯電話、タブレット、スマートフォン等、新たな媒体の出現により、住民のメディア環境に対する対応、セグメントした広報ターゲット、変化する住民の生活環境、広報紙と各メディア間の連動等、訴求者と媒体特性に考慮した広報が求められよう。媒体間を繋ぐハブ機能としての広報紙の役割を再認識し、情報発信を紙面で心がけたい。

なお、本年度の応募作品は前年度より1紙多い36紙であった。

平成24年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品



最優秀 中野区

なかの区報 平成24年3月20日号

発行部数(回数): 192, 500部(23回)

判型(ページ数): 冊子(16ページ)

担当者数: 4人(専任4人、兼任0人)

●冊子型の利点を十分に生かした作品に仕上がった。東日本大震災から1年というタイミングで企画された「特集東京に大地震-その瞬間を生き抜くために」は、焦点化が成功して非常に興味深い記事になった。ポケットマニュアルは秀逸。区民意識、住民意識調査結果はもう少し分析がほしい。(大井)

●巻頭特集は、備えに関する情報を図解で住民に分かりやすく訴求している。また、紙面の一部を切り取って使う「ポケットマニュアル」、チェックを入れることで備えの状況が把握できる「我が家の防災」等、アイデアのある紙面作りに担当者の広報にかける熱意を感じる。6頁の「実態調査」も、グラフを用いて訴求力のある編集である。(長岡)



第一席 足立区

あだち区報 平成24年10月10日号

発行部数(回数): 317, 900部(24回)

判型(ページ数): タブロイド判(16ページ)

担当者数: 4人(専任4人、兼任0人)

●区制80周年記念号「まだまだあります、とっておきのあだち」は、記念号らしい華やぎのある作品に仕上がった。地域の文化資源はしばしばその歴史の中にある。歴史を振り返っての魅力の再発見は、新たな歴史を創り出すためのスタートになる。広報にはこうした構想力が求められる。(大井)

●表紙及び6・11面と連動した特別展は、仏像の写真・解説と共にインタビュー記事で構成され、紙上展として楽しめる丁寧な編集である。企画・表現とも優れている。7～10面は、引き抜いて保存ができる仕組みに好感が持てる。ただ、見出しが7面ではなく10面に掲載されているため、現状の見出し位置は混乱をきたす恐れを感じる。(長岡)

平成24年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品

見ると面白い記事が満載
紙面2面(11月11日) 2012年(平成24年)11月11日

星田区のお知らせ2012.11.11 NO.997 (11月11日 210部)

すみだ

発行: 星田区(〒201-8502) 15503-1111 FAX: 〒201-8502 星田区事務局一丁332番20号
http://www.city.sumida.lg.jp/

区民の誇りである葛飾北斎を顕彰し、地域を活性化するための拠点「すみだ北斎美術館」の開設準備を進めています

世界的に有名な葛飾北斎は、現在の北斎通り(亀戸)付近で生まれ、90年の生涯のほとんどをすみだの地で過ごしました。ここでは、郷土の偉大な芸術家・北斎を地域の誇りとして多く顕彰するため、「すみだ北斎美術館」の開設準備を進めています。開館後は、新たな文化拠点の拠点としてだけでなく、まちの活性化の拠点として地域振興等の活性化にもつなげていきます。平成27年度に開館予定の「すみだ北斎美術館」に、ぜひ、ご期待ください。

すみだが生んだ。世界の偉人・葛飾北斎
葛飾北斎は、江戸時代中期(1734年)に生まれ、90年の生涯をすみだで過ごしました。北斎は、江戸時代中期(1734年)に生まれ、90年の生涯をすみだで過ごしました。北斎は、江戸時代中期(1734年)に生まれ、90年の生涯をすみだで過ごしました。

すみだの歴史や文化を伝えるための拠点として、すみだ北斎美術館の開設準備を進めています。開館後は、新たな文化拠点の拠点としてだけでなく、まちの活性化の拠点として地域振興等の活性化にもつなげていきます。平成27年度に開館予定の「すみだ北斎美術館」に、ぜひ、ご期待ください。

すみだの歴史や文化を伝えるための拠点として、すみだ北斎美術館の開設準備を進めています。開館後は、新たな文化拠点の拠点としてだけでなく、まちの活性化の拠点として地域振興等の活性化にもつなげていきます。平成27年度に開館予定の「すみだ北斎美術館」に、ぜひ、ご期待ください。

第二席 墨田区

墨田区のお知らせ「すみだ」平成24年11月11日号

発行部数(回数): 90, 000部(36回)

判型(ページ数): タブロイド判(8または4ページ)

担当者数: 5人(専任5人、兼任0人)

●地域の文化資源を発掘しどのように活用するかは重要な課題だが、開設の準備を進めている「すみだ北斎美術館」は非常に興味深い試みである。どのように住民をインボルブするかが重要な課題である。生活情報のコンパートメント化は見事に成功している。(大井)

●特集扱いの「すみだ北斎美術館」のプレ告知紙面は、活性化の施策としての美術館の位置付け、北斎の人物紹介、住民の声等、住民に企画意図が伝わる編集である。他の紙面は、訴求情報に応じて単面で情報が完結しており、台割が良く考えられている。また表現も、情報内容でレイアウトに変化がある。住民視線での表現に好感が持てる。(長岡)

どよに響き 未来へつなぐ 人々みどりの輝く わがまち練馬

ねりま区報

11/1

平成24年(2012年) 第1628号
毎月11日・11日・21日発行

発行部数: 245, 400部(36回)
判型(ページ数): タブロイド判(9. 1ページ)
担当者数: 5人(専任5人、兼任0人)

2・3面で特集

ボクがご案内するねりま

練馬区最大のアニメの祭典
練馬アニメカーニバル
2012を開催
11月10日・11日
午前10時～午後5時
(イベントの開催は3面へ)

Animation City Nerima
アニメのまち練馬区

①練馬区最大のアニメの祭典「練馬アニメカーニバル」を開催。②日本最大のアニメの祭典「東京アニメフェスタ」を開催。③日本最大のアニメの祭典「東京アニメフェスタ」を開催。

第二席 練馬区

ねりま区報 平成24年11月11日号

発行部数(回数): 245, 400部(36回)

判型(ページ数): タブロイド判(9. 1ページ)

担当者数: 5人(専任5人、兼任0人)

●検索性の向上を目的に紙面のリニューアルをしたそうだが、成功したようだ。確かに検索性は高まり、かつ読みごたえがあり、親しみやすい紙面になった。アニメと農という区の重要施策が応募作の中心となるコンテンツの力はさすが。これらに単に寄りかかるのではなく、磨き上げる努力が大事である。(大井)

●1面は、ビジュアルを大きく使いインパクトのある魅力的な表現。また記事も、住民が興味を抱く企画編集で、閲読率の向上効果があったと思われる。お知らせ紙面では、情報の分類と色分けも適切で検索しやすい。ただ、住民視点で考えると、色と情報分類の関係を伝えるクレジットを紙面に表示したい。(長岡)

写 真 部 門

〈写真部門 総評〉

●大石委員

10年以上審査をしてきたが、当初とは雲泥の差である。機材・技術両面とも質が向上しており、格段にレベルアップしていると感じる。

しかし、1枚写真の部では、広報紙という限られた紙面とのミスマッチを感じるものもあった。今後は、写真だけでなく、紙面構成等もよく研究し、向上して欲しい。

また、組み写真についても、写真点数が多く、カタログのようにになっているものも見受けられた。起承転結・ストーリー性を持った写真構成となるよう、過去の受賞作品や他区市町村の広報紙を参考にするなど研究して欲しい。

●小林委員

1枚写真の部については、毎年、テーマ広報に沿った、写真の質の向上を感じます。写真を1枚使うことによって、訴える力が増して、説得力を味方に出来る力を「写真」は持っています。従って、その扱い方をもう少し大きく見せたら効果的な写真がありました。それと写真はいかに無駄を省くかという作業でもあります。トリミングの仕方に工夫が必要であると感じました。

組み写真についても、年々、写真の質は向上していると思います。組み写真とは数を多くすればよいというものではありません。文と同じ要に起承転結が映像として表現されているかが大切です。写真サイズやレイアウトを工夫することによって効果も増します。過去の入賞作品などを観て、枚数の設定やレイアウトの仕方、トリミングの重要性を考え、カタログ的な組み写真に陥らないことを望みます。

●板橋委員

今回初めて審査をさせていただきましたが、力作が多く驚いています。広報写真では、写真としての質はもちろんのこと、伝えたい内容を一枚の写真でわかりやすく表現する必要があります。特に表紙（一面）に使用する場合、手にとっていただけるように、目を引く、印象的なものである必要もあります。今回の応募作品では、個々の写真は技術力が高く、すばらしい写真が多かったのですが、紙面上でその写真の良さが伝わってこないものが数多くありました。いろいろと制約があると思いますが、大見出し、リード等と写真の比率、文字の写真への被らせ方に一工夫することにより、伝わりやすくなると思います。また、これもいろいろと制約があると思いますが、元写真の良さを生かすように、印刷時の写真コントラスト、明暗濃度の調整に気をつけて下さい。

行政における広報写真は、地域住民に何かを伝える、地域の記録を残す写真です。それは、そのまま地域の財産として残ることになるでしょう。今後もより良い広報写真を目指していただきたいと思います。

〈写真部門 総評〉

組み写真の部は、いろいろなテーマがあり、個々の写真の技術力も高度なものでした。しかし、広義な意味では組み写真なのですが、このようなコンクールで定義する組み写真ではないものが多いように感じました。コンクールで定義する組み写真は、多くの場合、ひとつのテーマに対して複数の写真（多くて10～15枚位）を組み合わせる内容を伝えていくものです。その際、組み写真にはストーリー性を持たせるのが一般的です。コンクールでは、見る側の感性を刺激するような要素も必要になります。広報誌では、テーマを絞った特集記事等が対象となると思いますが、インターネット上で「全国広報コンクール」入選作等も閲覧できるので、参考にさせていただきたいと思います。

平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

最優秀

区市町村名	江東区
広報紙名・掲載号	こうとう区報 平成24年6月11日号
意図	突如発生する「ゲリラ豪雨」の物凄い勢いや恐ろしさを伝えたいと思っていた。そのため、滝のように降りそそぐ雨の質感を表現するのが良いと考え、区役所入り口前で次のとおり撮影した写真を掲載した。 ①シャッタースピードを遅めに設定し、地表にたたきつける雨を写し入れた ②モデルとして広報係員を奥から手前に向けて傘をさしながらゆっくり走ってもらい、足を跳ね上がる雨を写し入れた ③駐車場に車が入ってくるのを待ち、車のライトに雨が照らし出されるように撮影した
審査委員コメント	●昨今問題となっている「ゲリラ豪雨への注意喚起」というテーマ設定が良い。また、そのテーマが非常に良く伝わる写真になっている。随所に工夫が見られ、何よりも写真に力がある。ただ、シャッタースピードが遅いせいか、雨粒がはっきり写らなかったのが残念だ。 ●「ゲリラ豪雨」というテーマの取り上げ方が素晴らしい。また、ゲリラ豪雨の勢いや恐ろしさが伝わってくる写真となっている。被写界深度を浅めに設定すればもっと良くなったのではないかな。 ●激しい「ゲリラ豪雨」、十分に伝わってくる写真です。遅めのシャッタースピードが、人、傘の動きの臨場感を出しています。紙面上で、道路上に跳ね返る雨、自動車のフロントグリル部の雨が見えにくくなっているのが残念です。オリジナル写真ではその部分が識別できるので、若干コントラストを上げると紙面上でももう少し見えてくるかもしれません。

一枚写真の部 最優秀 こうとう区報 平成24年6月11日号



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

第一席

区市町村名	瑞穂町
広報紙名・掲載号	広報みずほ 平成24年8月1日号
意図	この写真は、瑞穂町の姉妹都市である、アメリカ合衆国・モーガンヒル市の中学生たちが、ホームステイで瑞穂町を訪れた際に参加した、夏の風物詩「夏祭り」での一コマです。 初めて目にする夏祭りの、日本の情緒あふれる雰囲気や、力強い太鼓と人々の掛け声に、大興奮の様子でした。中でも山車がお気に入りだったようで、その悠々と進む姿や、外道・キツネの踊りを見て、「nice!」「cool!」と叫んで、大はしゃぎ。 …その瞬間、山車をバックに中学生たちにカメラを向け、声をかけると、最高の笑顔とポーズをきめてくれました。瑞穂の伝統文化に初めて触れ、純粋に感動する表情を、瑞穂の住民の皆さんにお届けしたい一心で、シャッターを切りました。 中学生という多感な時期での今回の体験は、きっと生涯忘れない思い出として、強く心に残ることでしょう。彼らが大人になった時、瑞穂町とモーガンヒル市の友好をさらに深める存在となって欲しい、さらに、瑞穂町の住民の皆さんにモーガンヒル市にもっと興味を持って欲しい、そんな願いから、表紙への掲載を決めました。
審査委員コメント	●国際色が豊かで、明るい未来を感じさせる1枚である。一人ひとりの表情を上手くとらえているだけでなく、正面からの光を上手に取り入れている。また、一歩間違えれば記念写真になるところだが、それで終わらずに祭りの雰囲気や動きを伝えている点で秀逸である。ただ、二人ほど目線が来ていないのが残念だ。撮影者は常に周囲に注意すべきである。 ●アメリカの中学生が夏祭りを楽しむ様子が伝わってくる。写真としてよくまとまっている。 ●日本の夏祭りを初めて体験した子供たち、楽しかったのですね。最高の笑顔です。山車の上に乗っているお面の人もいいアクセントになっています。地域での国際文化交流が良くわかる一枚ですね。ただ残念なのは、全員の視線がカメラに向いていません。また、やや斜めのため、画面に安定感が不足しています。表紙の写真なので、正面から撮影して画面を安定させるとより印象的な写真になると思います。

平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 第一席 広報みずほ 平成24年8月1日号



おもな内容	8月号 目次	みずほサマーフェスティバル	2
	8月号 目次	敬老会へのお願い	3
	みずほ新聞板	2012年8月号 敬老会 ほか	4~6
	福祉	高齢者の熱中症に注意 ほか	7~11
	インフォメーション	はなもんまつり サービス提供 ほか	12~13 15~18
教育委員会からのお知らせ		県立高等学校体育大会 ほか	19~23

OMATSURI

町田市・米ヶ岡地区の
中学・高生たちが町を訪問し、7
月 15 日には夏祭りに行きました。
初めて目にする山車・みこしや、
人々の熱意に大感動。「日本の夏」
を存分に堪能しました。
(副編集長 14・15 ページ)



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

第二席

区市町村名	墨田区
広報紙名・掲載号	墨田区のお知らせ「すみだ」 平成24年7月11日号
意図	熱中症の予防には、帽子の着用やこまめな水分補給が効果的です。また、子どもは地面からの距離が近く、照り返しの影響を強く受けるため、保護者が気をつけてあげる必要があります。こうした熱中症予防の要素を1枚の写真で表現するため、この写真を掲載しました。 水を飲み終え、「ぶはっ！」と満足げな子どもと、それを笑顔で見守るお母さんの温かい雰囲気に、写真をご覧になった方の心もふっと和むように、という意図も込めています。
審査委員コメント	●親子の表情を上手くとらえており、明るい雰囲気が伝わってくる。また、テーマ設定も良い。ただ、右側の建物にはあまり意味がないように思われるので、その部分をトリミングして人物を大きくすれば、人目を引くさらにインパクトのある写真になったのではないかな。 ●親子の表情をうまくとらえており、和やかな雰囲気が伝わってくる。カメラ位置を低くしたことも、それを助長している。右の部分をカットするなど、トリミングに工夫をすればもっと良くなったのではないかな。 ●いいですね。子供の表情、お母さん(?)の笑顔、見る側が幸せな気持ちになります。この笑顔を守るための「熱中症予防」ですね。技術面でも撮影位置、高さ、深度など申し分ありません。紙面上では、写真の大きさが小さいため、この写真のよさが半減しています。レイアウトの工夫で大きめに掲載したほうが目を引く表紙になると思います。

第二席

区市町村名	羽村市
広報紙名・掲載号	広報はむら 平成24年6月15日号
意図	都内でも珍しい風景である市内唯一の水田では、毎年子どもたちに自分たちが食べるお米がどのようにできているのかを知ってもらおうと、稲作体験事業が行われている。 6月に行われる田植えには、毎年多くの大人と子どもが参加する。 自分の足がドロドロ・ヌルヌルの土につかるという経験したことのない感触に、子どもたちは悲鳴にも近い歓声を上げる。 最初は戸惑いながらも、徐々に作業に慣れ、自身の顔や洋服が泥だらけになっているのにも気にせず、夢中で田植え作業をしている子どもが目にとまった。 田植えの作業は常に下を向いて行うため、表情を捉えることは難しいが、この写真は田植えをする少女たちが、「ここに植えて!」「よし!ここね!」と会話しているのが聞こえてくるかのような瞬間を捉えたものである。 子どもが夢中になって作業する姿が伝えられる1枚であると感じたため掲載した。
審査委員コメント	●子どもたちの表情や泥の付いた足から、土に触れて生きることの大切さが伝わる1枚で、写真として秀逸である。また、広報紙の表紙に相応しい写真でもある。しかし、トリミングやコントラスト等、印刷時に一工夫できる点はもう少しあったのではないかな。広報紙になって、素材の良さが薄れてしまったことが残念である。 ●子どもの踏ん張っている姿に迫力がある。また、望遠の使い方も上手い。ただ、トリミングにより男の子の右足が切れてしまったのがもったいない。 ●子供たちが泥だらけになっている風景は、近年なかなか見ることがなくなりました。稲作体験ということですが、多くの子供たちにこういう体験で土に親しんでいただきたいと思います。写真の女の子の表情もいいですね。ですが、紙面上の写真は元写真の良さが伝わってきません。印刷時にコントラストを上げる、明るくするなどの工夫がほしいですね。特に表紙に使用するときには、広報誌の顔となるので、オリジナル写真の良さを伝えられるように最大限の工夫をしたいものです。

一枚写真の部 第二席 墨田区のお知らせ「すみだ」 平成24年7月11日号



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 第二席 広報はむら 平成24年6月15日号



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

最優秀	区市町村名	八王子市
	広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 平成24年9月1日号
	意図	8月3～5日に開催された八王子の真夏の祭典「八王子まつり」の様子を組み合わせたもの。 この祭り最大のみどころである、各町会自慢の豪華な山車を前面に出すとともに、「人」にスポットを当て、さまざまな世代が祭りを楽しむ姿を捉えた。 紙面から祭りの楽しさ・賑やかさを感じてもらえればと思う。同時に、伝統ある地域文化の継承について考えるきっかけにしてほしい。
	審査委員コメント	●写真1枚1枚に力があり、祭の賑わい、市民の熱気が伝わってくる。レイアウトにも工夫が見られ、写真で見せるストーリーがあり、組写真のよさが1番出ている。また、背景の夜空を生かしたデザインや、雰囲気に合わせてフォントの選択が上手い。ただ、デザイン重視のために写真をトリミングしてしまっている点が少し惜しい。 ●紙面全体を通して、祭りの市民参加の熱気が伝わってくる。写真の選択にメリハリがあり、祭りの雰囲気やストーリーが感じられる。また、あえて黒い部分が多い写真を使用していることで全体が締まっている。タイトルのフォントの選択も良い。 ●2年ぶりの「待ちに待った夏祭り」の雰囲気が伝わってきます。紙面上の背景に使用した写真も効果的です。全体にストーリー性があり、写真構成もいいと思います。個々の写真をトリミングして配置していますが、若干単調な印象がありますので、トリミングの仕方、写真の配置をもう一工夫することでさらに良くなると思います。

平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 広報はちおうじ 平成24年9月1日号



(1/11)



(3/11)



(2/11)



(4/11)



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 広報はちおうじ 平成24年9月1日号

(5/13)



(6/13)



(7/13)



(8/13)



(9/13)



(10/13)



(11/11)



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

第一席	区市町村名	足立区
	広報紙名・掲載号	あだち広報 平成24年8月10日号
	意図	都市・自然・人間の調和を区のシンボルマークとし、水と緑のまちを目指す足立区では、年々減少していく農地をいかにして守っていくかが課題となっている。今号では、農業や地産地消へ興味をもってもらうことを目的に、区内の農家の思いや、都会で農業を営む意味、消費者側の声などを紹介。畑自体が珍しいと感じる若い世代や、実際に食品を購入する機会の多い主婦、畑仕事に興味のある定年退職後の団塊世代をターゲットに据えた。 全体を通して、農業イコール「地方」「衰退」といったイメージを払拭しようと、元気でみずみずしく、勢いのある写真で紙面を構成した。 水耕栽培の写真は、都会ならではの近代化された農スタイルを大きく掲載することで、進化していく区の農業の勢いを伝えることを狙った。新都市交通と畑が共存した都会の農業ならではの写真は、昔の田畑の写真を並べることで、かつて豪農地域といわれた区の農業が現在も形を変えて受け継がれていることを表現している。また、みずみずしい野菜の写真を入れることで、足立区は都内であるにも関わらず、収穫したての新鮮な野菜を手に入れることができる地域であることをアピールした。 写真は、野菜のおいしさやみずみずしさと、野菜を手にした人々のいきいきとした表情を伝えることにこだわって撮影した。
	審査委員コメント	●都会の農業について、区民に伝えるというテーマは広報の方針として素晴らしい。今後も是非続けていってほしい。また、全体としてよくまとまっており、レイアウトも面白い。ただ、少し説明的な写真もあるので、構成を工夫するともっと良くなるのではないかな。 ●紙面全体から、野菜のみずみずしさや野菜を手にした人々のいきいきとした様子が伝わってきて、都市農業の力強さを感じさせる。 ●野菜、生産者、消費者等、どのカットもクオリティーが高く、印象的です。しかし、組み写真の全体の流れとしては、整然としすぎていて何かカタログ的な印象を受けます。写真の大きさにもっと変化をつけて配置することで、ページ全体の印象が変わってくると思います。

組み写真の部 第一席 あだち広報 平成24年8月10日号



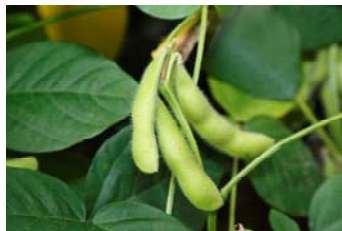
平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第一席 あだち広報 平成24年8月10日号

(7/15)



(8/15)



(9/15)



(10/15)



(11/15)



(12/15)



(13/15)



(14/15)



(15/15)



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

第二席	区市町村名	墨田区
	広報紙名・掲載号	墨田区のお知らせ「すみだ」 平成24年3月1日号
	意図	「スカイワゴン」というワゴンのお店を紹介するだけでなく、よりたくさんお客様がワゴンに来ていただけることは、障害者福祉施設利用者の自立にもつながることを区民の皆さんに伝えるためにこの特集を組みました。 作成にあたっては、区のお知らせの読者が、このページを開いた際、視覚からも心に訴えかけられるよう努めました。 作り手の真剣な眼差しと、その眼差しから生み出された製品、不慣れながらも一生懸命に陳列や接客に取り組む姿勢、そして笑顔。これらをちりばめることで、福祉作業所に通う方々のありのままを伝えようと試みました。また、文章で説明するのではなく、「作り手」「作業所への支援者」「販売員」「社会へと巣立っていった方」からの生の声で読者に訴えかける形を取りました。
	審査委員コメント	●テーマもよく、1枚1枚はいい表情をとらえた良い写真である。しかし、素材は良いにもかかわらず、小さく多数掲載したため、写真の持つ力や印象が薄れてしまった点が大変惜しい。全て平等にアルバム的に掲載するのではなく、写真点数を絞りレイアウトを工夫するなどしてメリハリをつければ、さらに良くなったのではないかな。広く区民に対し伝えるという観点から見せ方に工夫することが求められる。 ●福祉作業所に通う方々の生き生きとした表情をとらえている。しかし、写真点数が多いことや全ての写真を平等に扱ったことにより、そうした良い表情をとらえた写真の良さが相殺されてしまった点が残念だ。 ●福祉作業所の期間限定販売ですね。作業中の笑顔など、写真はそれぞれ良く撮れていると思います。紙面上では点数が多く、大きさの変化が少ないせいか、あまり印象に残りません。個々の写真は非常にいい写真なので、作って販売するまでの工程にストーリー性を持たせた写真配置、写真の大きさにもっと変化をつけた紙面構成をすることで、より伝わりやすい記事になると思います。

平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第二席 墨田区のお知らせ「すみだ」 平成24年3月1日号

(7/27)



(8/27)



(9/27)



(10/27)



(11/27)



(12/27)



(13/27)



(14/27)



(15/27)



(16/27)



(17/27)



(18/27)



平成24年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第二席 墨田区のお知らせ「すみだ」 平成24年3月1日号

(19/27)



(20/27)



(21/27)



(22/27)



(23/27)



(24/27)



(25/27)



(26/27)



(27/27)



映 像 部 門

●関委員

ほとんどがレギュラーの広報ニュースとなり、そのレベルもかなり高くなっている印象がありました。ただレベルは高くなったけれど手なれたルーティン感が強くなってしまおうと区民、市民に届きにくく、題材選び、取材の深さがより重要になってくると思います。

題材として広く興味を持たれそうなもの、その自治体の個性や意思が強く打ち出されているもので、丁寧に計画的に取材されているものを評価させていただきました。

また、今回は東京都の区政80周年記念と銘打った特別番組が多く、式典で放映という目的の物もいくつか見受けられました。どの地区で暮らしたいか、どの地区が楽しそうかと競うような、区のプロモーションビデオ的な意味合いもあり自治体のブランディングの必要性も感じさせられました。制作担当者の方々は、自分たちが普段テレビなどを見てどんな番組に惹かれるか、どんな番組が退屈かと考えて制作に臨んだり、他の地区の取り組みも参考に切磋琢磨されると全体のレベルも向上すると思います。

〈映像部門 総評〉

●高橋委員

今回の広報コンクール映像部門に応募された各番組を拝見して感じたことは、近年続いて来た傾向でもあります、「小粒になったな・・・」ということです。予算の問題か制作者のマインドの問題か、それとも両方の問題か、いずれにしてもコンクールに応募するからには多少は特別ですよ、という位置づけの番組がもう少しあっても良いと思いました。小粒というのは尺の問題ではなく、マニュアル化され、スマートに小さくまとまっていて制作者の顔がよく見えない番組のことです。まして、今年度は区制 80 周年記念を謳うタイトルもあり、それなりの予算と企画を用意してあったと思いますからなおさらです。

それと全体に“情報番組化”しているという印象がひと頃より強くあります。インターネットで調べればたいがい情報は手に入る世の中です。HP にアップしておけば行政の公式の配信情報は伝わっていきます。もっとも、見せ方によっては情報を流すだけでも結構ウェルメイドな番組になると思います。年間の本数の予定もあるでしょうから、委託元のオーダー通りルーティンワークとして制作せざるを得ない状況も察せられます。しかし、それを見る側の視聴者の立場に立ってもう一度考えてみてください。番組をわざわざ見るのは情報が欲しいだけでしょうか？ 多分違うと思います。漠然とはしていても、視聴者は何か少しでも心に刺さるものを求めているのではないのでしょうか。ここで我々は一回原点に立ち返ってみるのも方法です。

言い古されたことかもしれませんが、制作者の取材対象に対する思い入れや愛情、情熱だけが見る人たちの心を動かすという定理は、多分今でもいつの時代でも不変で有効です。要は、企画から制作まで制作者が自分の責任で頑張るしかないのです。来年は是非とも、今年の傾向を払拭して、どうせ制作するなら一過性の情報やお知らせだけではない、骨太で感動的な広報番組の登場を敢えて個人的には期待したいと思います。

平成24年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

最優秀

区市町村名	豊島区
題名	区制施行80周年記念映像-TOSHIMA80-
時間・制作方法	15分・委託制作
主な内容	本作品は3部から成る。第1部は「オープニング」とし、「豊島の日」を表している。朝のラッシュアワーの様子から始まり、サンシャイン水族館や高齢者で賑わう巣鴨地蔵通り等、豊島区の要素をふんだんに盛り込んだ斬新な映像となっている。 第2部は「区の魅力」、第3部に「安全・安心創造都市の実現に向けた取り組み」を取り上げている。「区の魅力」では、ソメイヨシノ発祥の地であることや、伝承されている文化、お祭り等、テーマごとに区の魅力を伝える。また、「安全・安心創造都市の実現に向けた取り組み」では、本区が今年5月に認証取得が決定した安全・安心まちづくりの国際認証制度であるセーフコミュニティの取り組みを紹介している。
制作意図	豊島区をダイナミックに表現し、観る人に訴える作品制作を心がけ、高所から区を俯瞰した画等スケールの広いものを使用し、音楽もテーマごとに設定。15分という時間の中に、豊島区を凝縮した作品に仕上げた。
審査委員コメント	●区政80周年記念の区のプロモーション映像として式典に映写されたものとのこと。区をいろいろな角度からとらえ15分に豊島区を凝縮ということで1画面に複数映像をレイアウトする手法は活気に溢れ見どころ楽し見どころ満載の豊島区を表現するのにも効果的であった。第三部の「安全安心創造都市」の実現に向けての取り組みは区民にぜひ知ってもらいたい情報であり強い意志を持って取り組んでいる様子が良く伝わってきた。区政も区のブランディングというフェーズに入ってきたという印象を受けた。（関） ●区制80周年記念番組。3部構成15分からなる豊島区のプロモーション映像である。内容的に掘り下げている訳ではないので目まぐるしい映像のテンポについていながら情報の流れを楽しむしかない。オープニング点描→ソメイヨシノ発祥の地→池袋モンパルナス→トキワ荘の住人達→池袋演劇祭→自由学園（フランク・ロイド・ライト設計）他大学群→祭り→セーフコミュニティ国際認証取得、という流れか。“豊島区”というPVになりにくい対象を強引にまとめ上げた力量は大いに評価するが、果たしてこの様な形にすべきかどうかは議論の分かれるところだろう。（高橋）

平成24年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第一席

区市町村名	八王子市
題名	市民の広場「このまちで共に～障害がある人もない人も共に安心して暮らせるまちづくり」
時間・制作方法	15分・委託制作
主な内容	八王子市では平成24年4月1日から、「障害者差別禁止条例」が施行された。これは、政令市を除く市町村レベルでは初となるもの。条例の概要や制定に尽力した人の声や思い、スポーツや課外活動などを通して生き生きと過ごす障害者の姿を紹介する。
制作意図	近年、法整備や支援制度の拡充、障害者スポーツの認知度向上など、障害者に対する社会環境は確実に整ってきている。しかしその反面、日常生活においては障害者への誤解や偏見、差別などが根強く残っていることも事実である。条例の施行をきっかけに、市がめざす「障害のある人もない人も共に安心して暮らせる」まちの姿を伝え、障害者との共生のために健常者はどうすればよいのか、映像を通して考えていただきたいと思い、作成した。
審査委員コメント	●24年4月から施行された、市の「障害者差別禁止条例」をきっかけに作られた理解促進のためのコンテンツ。市が委託する相談支援センターに勤務されている実際に障害者であり車椅子の生活の方の明るく前向きな発言は説得力があり、「景観重視のヨーロッパの石畳風は車椅子にとってはありがたくない」ことなど思わず傾聴してしまう。また視覚障害者も参加できる「ブラインドサッカー」も新しい試みとして紹介され驚きとともに市の取り組みが着実に広がっていることを知ることができる。レポーターが現場に出向き体験しながら、直接声を聞きながら、伝えるスタイルは視聴者の共感を得やすい作りとなっている。（関） ●八王子市で去年から施行された「障害者差別禁止条例」に伴い、実態との開きを埋めるべく制作された好企画。法整備や支援制度の拡充のみならず、健常者と障害者が実際にはどう向き合えばよいのか番組は問う。障害のある人も無い人も一緒に出来るブラインドサッカーにヒントを得て、八王子市が目指すのは「障害のある人もない人も共に安心して暮らせる」まちづくりである。障害者がインタビューで「街でもとりあえず声をかけてください!」と言っていたのが印象的で、付き合い方の極意だと感じた。（高橋）

平成24年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	江戸川区
題名	えどがわ区民ニュース 平成24年11月1日号特集 がんで命を落とさないために みんなで取り組むがん予防
時間・制作方法	21分・委託制作
主な内容	生涯に「がん」にかかる人は2人に1人というがん大国、日本。 特に江戸川区は、東京都中でもがんの死亡率が高く、このため平均寿命も他に比べ短いという健康政策上の大きな課題を抱えています。こうした江戸川区を取り巻くがんの現状を専門家の意見を交え、明らかにするとともに、がんになることで起こる様々な問題をがん経験者や専門家の話を聞きながら考えます。 そして、がんにならないこと、それ以上にがん検診でがんを早期に発見し治療することの大切さを訴えます。
制作意図	江戸川区では、健康面の最重点施策としてがん予防に取り組んでおり、この施策を推進するために企画した番組です。 一般的ながんの知識や怖いといった話に留まらず、専門家やがん経験者のインタビューを通し、がんの悪影響を多面的に明らかにするように心がけ、敢えて強い表現も使いながら、がん検診受診への訴求力を持たせるように意図して制作しました。 また、制作費を抑えつつ番組の効果を高めるため、CG合成やアバン部分は自主で制作しました。
審査委員コメント	●江戸川区の癌の死亡率が高く、そのことで平均寿命が他区に比べて短いという課題に対する取り組みを紹介すると同時に区民の健診促進をはかるのが目的の作品。癌と戦い生き残った癌サバイバーと呼ばれる経験者の「仕事は辞めちゃいけない」という言葉にはリアリティーがあり、闘病中の働き方の支援活動なども紹介される。癌の基礎知識、健診現場、内容の紹介で健診のハードルを下けているが、医師の「早く見つけることに尽きる」という言葉、また江戸川区長の言葉もわかりやすく見た人に検診受診の必要を痛感させるであろう。（関） ●江戸川区はがんの死亡率も高く、そのためか平均寿命も他の区よりも短いそうである。この切実な課題を受けてこの番組は、がんの早期発見のためのがん検診受診を訴えている。専門家による一歩踏み込んだ強い表現も出てくるが、その分メッセージは確実に届いている。がんサバイバーの証言、最新の治療法の紹介、高額の治療費に対応するための制度の問題にも言及して何よりも早期発見のための検診の必要性を強調している。制作者の情熱と企画意図が十分伝わってくる力作。（高橋）

平成24年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	調布市
題名	テレビ広報ちょうふ（1月10日号）
時間・制作方法	30分・委託制作
主な内容	「テレビ広報ちょうふ」は、市報掲載情報を中心とした市政情報や市内のお店情報等を映像を通して市民に分かりやすくお届けする情報番組です。 今回の応募作品は、「映画のまち調布」のPRとして、市内の映画関連産業（撮影所、小道具専門店など）を紹介しています。 また、新たに稼働する「新ごみ処理施設」についても、その建設現場からレポートをしています。
制作意図	今回の番組制作において特に意識したのは、撮影所の内部や新ごみ処理施設の建設現場など、普段は見ることのできない場所を紹介し、視聴者にワクワク感とお得感を与えられるような構成としたところです。 また、「映画のまち調布」では、職員が楽しみながら出演していると点にも注目していただきたいと思います。
審査委員コメント	●2人のキャスターをたてて市民に有益な情報を発信解説する30分番組。2テーマをレポーターが現地に出向いて取材するスタイル。「視聴者にワクワク感とお得感を与えられる構成」との制作意図どおり、レポートスタイルも柔らかくノリ良く楽しげであり、軽い気持ちで情報を受け取ることができる。今回のテーマ「映画のまち調布」「新ごみ処理施設」いずれも普段は見ることのできないところへ踏み込み驚きのある映像を提供している。明るい音楽にのせてのテンポ良いインタビューも視聴者を飽きさせない。（関） ●前半は調布は映画の町ということで、キャスターやリポーターが市内の映画関連産業を案内する。複数の撮影所を訪ね、歴史から最新の撮影設備まで詳しく紹介される。普段は見れない小道具専門店の中は、珍しいものがいっぱいしまっており興味をそそる。市職員の出演も意外と自然で効果的だった。後半は建設中の新ごみ処理施設の探訪。これも巨大な施設で、稼働しだすとまず見ることが出来ないであろう貴重で興味深い映像である。視聴者にワクワク感を、という狙いは成功している。（高橋）